令和５年度第３回徳島県総合教育会議　会議録

日時：令和６年１月１７日（木）１０：００～１１：２０
場所：徳島県庁３階　特別会議室

１　開会

（司会進行）

＜菊地部長＞

おはようございます。本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。ただいまから、令和５年度第 3 回徳島県総合教育会議を開催いたします。私は司会進行を担当します徳島県政策創造部長の菊地でございます。どうぞよろしくお願いをいたします。なお、当会議の議事内容につきましては、後日、県のウェブサイトにより公開いたしますので、IC レコーダーにより録音させていただくことを御了承いただければと思います。本来でありますれば、本日御出席いただいております方々を御紹介させていただくところですが、時間の都合により別添の名簿と配席図での御紹介とさせていただきます。

それでは、ここからは後藤田知事に進行をお願いしたいと思います。後藤田知事、よろしくお願いいたします。

（あいさつ）

＜後藤田知事＞

皆さん、おはようございます。この度の、総合教育会議御参集いただきまして、誠にありがとうございます。本日の議題はですね、徳島県教育大綱と、学区制ということになっておりますが、改めて、我が県における教育、タブレット問題をはじめ、今いじめも過去最多、引きこもり、DV、不登校、これはもう大変な、今、状況でございます。こういった現状に、危機感を改めて、新たにして、新次元で、様々なことをやっていかなければいけないと、このように思っております。

教育大綱は大きな骨太の話でございますが、これからまた部活動が、なかなか厳しくなって地域移行ということにもなる、こういった課題も大変大きな問題ですが、もう他の県では先進的な事例が随所に出ております。こういったことも積極的に我々県行政としても学びながら、早めに対処をしていきたいと、このように思っているところでございます。

タブレットについては、更新時期を踏まえて、しっかりとした知見に基づいた買換えということを行っていきたいと、このように県としては考えております。そういったものに予算を配分すると、こういう考え方でございます。

あとおかげさまで校則の問題は非常に自立､自発的な取組が各高校でなされております。若干一部、生徒の言うことを全く聞かない高校が約１校ありましたが、これについては改めて教育長からしっかり責任問題を含めて話をしていただきたい。また中学小学校は、これは一義的には市町村でございますので、この点についても、私のところには中学校の校則もなんとかしてくれという子どもたちからの悲痛な叫びが私の SNS に届きます。これも逐一、教育長には教育委員会には話をして、その学校の校長先生、これはやっぱり管理者の責任がございますから、こういうことを毎回毎回私がやっているっていうのが今の現状です。これは危機的な状態ですよですから。ガバナンスが効いてないと、私はそう思っ

てます。小学校に至っては小学校一年生が女の子はリボンの色を指定があると、俺はもういい加減にしてくれと、こういう子どもの声、もう本当に何をやってるのかな学校現場はと、こう思うところでございますので、そういったことはまた改めて校則問題については皆さんにまた御議論いただきたいと思いますが、本日は教育大綱、これは素案をお示しした前回会議以降ですね、県議会での御議論もいただき、またパブコメもいただきました。そういった御意見をいただきながら、委員の皆様の御意見御提言を踏まえまして、今回、次期徳島教育大綱の最終案としてお示しさせていただき、委員の皆様から御意見を改めて最終的にいただきたいと思います。

２つ目の学区制の問題でございますが、これも古くて新しい話で、これもやはり何も手をつけてこなかったという状況の中、いよいよ市町村長からの熱い要望、そして先般も東部地区の、徳島市を中心とする、市町村長さんとの御議論をさせていただきました。２時間ほどたっぷりとさせていただいてですね。本来の学区制の意義が失われている中で、選ぶ権利また選ばれる学校、高校のレベルアップ、こういったことを、いろいろ論点として挙げられたわけでございます。改めてその当日の首長さんの方々のお考え、また、県民の皆様の声を皆様方に御紹介させていただきながら、教育委員の皆様とも意見交換をさせていただきたいと思います。私からはもう「実行する」という話をしました。もう先送りはしません。こういう話をさせていただいておりますので、そういった姿勢のもと、教育委員会とも連携を図っていければと、このように思っております。以上であります。

２　議事

（進行）

＜後藤田知事＞

それでは、議事を進めます。それぞれ事務局より説明の後、意見交換、こういった流れでお願いしたいと思っておりますが、まず教育大綱につきまして、事務局から説明をお願いします。

（１）次期「徳島教育大綱」（案）について

（事務局より、資料１に基づき概要説明）

＜後藤田知事＞

それでは、ただいまの説明、最終案につきまして、改めて最終的に修正すべき点ございましたら御意見いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

＜島委員＞

じゃあ私からですが、今、知事からも校則の見直しについてのお話ございましたけれども、この背景に何があるのかということで、文部科学省が発表しているお話だと、複雑に変化の激しい社会の中では、組織のこれまでのあり方を前提として、どのように生きるかだけではなく、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置づけ、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に課題を解決していくため

の力がこれから必要となるとされておりまして、これは、意見を言っても大枠は変わらないとか、そうした経験が大人になって、意見を言っても変わらない、選挙に行っても社会は変わらないというような考え方につながらないようにするべきだということが背景にあると。前例踏襲主義ではいけないということを訴えているんだろうと思います。私はこれを読んで、アントレプレナーシップの醸成の必要性を訴えているのかなというふうに受け止めてまして、日本語だとこれは、起業家精神って訳されてしまいますので、起業する人に特有の資質だと誤解されがちなんですが、本来の意味は「世の中の課題に対して新しい解決策を打ち出して、リスクを恐れずに立ち向かう精神姿勢」を指すということで、ＥＵでは、早くからこのアントレプレナーシップの醸成を重要視していて、あらゆる人にとって重要な能力の一つで、個人の成長や積極的な市民性、社会参画や雇用可能性を高めるというふうにされているそうです。このアントレプレナーシップを育む条件としては、一つは発言しやすい環境、二番目は新しいアイデアを否定しない、三番目は成功事例を参考にする、というこの三つが大切だそうです。校則の見直しの場面でも、これらのテーマを大切にしていくべきだろうと思います。一部、今、探求活動などで明言はされていませんが、アントレプレナーシップの醸成をしているんだと思いますが、これはもっと進めていくべきだと思いますし、知事が校則の見直しを進めておられるのも、この意識の醸成を、若年者層から図りたいということなのではないのかなと私自身は感じております。今の若者はこれから直面する日本の少子高齢化も、今の我々の世代よりもより拍車がかかってきますし、現状維持っていうのは、考えようによってはリスクであるという意識醸成をですね。そしてまた自分で主体的に動いてあるべき姿に変えていくということを、子どもの頃から学んでいくことの必要性を感じていくということが、非常に大切なのではないかなと。今回、教育大綱もそういった趣旨のことも書かれていますが、そうしたことをまた謳っていただけたらなというふうに感じた次第でございます。

＜後藤田知事＞

ありがとうございます。今ね、自主・自立と主体性、これ校則の話も触れていただきました。私、逆に校則があったおかげで今回高校生が壁を打ち破るという成功体験をしたのかなと思ってね。逆説的に捉えてますが、本当に、改めて、その環境整備をしていただいた教育委員会の皆様にも感謝申し上げたいと思っております。

他に何かございますか。はい、三木委員お願いします。

＜三木委員＞

失礼します。先程知事もおっしゃられた、課題とかを網羅した大綱ができてきていると思います。一方で、今年１月１日に起こった能登半島の地震を受けまして、日本はどこに住んでいても地震からは逃れられないということの危機感を改めて強く持ちました。スクールポリシーなどで学校ごとの特色を載せていると思いますが、そこにこれからの時代は災害時に関しての取り組み方を学校ごとに載せるっていうのも必要があるのではないかなと思いました。大綱の中にもある「自分で考えて動く」という項目の中にも関わることだと思うんですけども、それを踏まえて、災害時に生き抜くための避難行動を、学校にいる間だけでなく、登下校時ということも想定して今までの避難訓練にプラスして、より具体

化した行動を各学校の事情ごとに訓練するということも、今からの時代の教育の大事な要素なのではないかと思っております。なので、この中に「生き抜く力を育む」という項目を新たに入れていただけたらいいのではないかなと思いました。

また、個性、国際性に富む人材を育むために、大綱にも書いてありますけども、世界に羽ばたいていくためには、進学をするにしても、就職をするにしても、自分の育った地域のことがわかっているっていうことはとても強みになると思いますので、ふるさと徳島への誇りと愛着を育てる一環としての地域の伝統行事などにしっかり関わっていって、経験をさせるということを、学校教育として取り入れる形を作っていっていただければと思います。以上です。

＜後藤田知事＞

今のお話でどうですか、事務局やまた教育委員会の事務方も。生き抜く力っていっても子どもにはまずその知識と経験を与えなければ、なかなかその、やっぱりゼロからの始まりですから。しかし、それを知識として与えられて、なおかつ自分で考えて、そして自分で伝える。確かにその災害対策という、個々のまた各論、戦略的な話になりました。今、教育大綱っていうのは大きな憲法という中の話でございますので、ここについてはどういう認識でしょうか。

＜榊教育長＞

今、知事がお話になったように、かなり大事な話ですので、教育振興計画の中で大綱の意図を汲み取った上で、具体的なものとして落としていくと、そういうことでやらせていただけたらというふうに思います。

＜後藤田知事＞

これ大綱でいうと、でもその大きなビジョンとしてはどこにあたるんですかね。生き抜く力とかっていう自分で切り拓くっていうのは。先ほどからの自主性とかそういうことなのかもしれませんが。読み取れるとしたら。

＜榊教育長＞

そうですね。重点項目ⅠからⅥまであるんですけど、先ほどの未来を拓く力を育む教育の推進、こういうふうなところでありますとか、文化・スポーツでしたら重点項目Ⅵのところになったりしますので、その中で教育振興計画も連動しておりますので、そこで詳しくやっていきたいと思います。

＜後藤田知事＞

確かに私も昨日、阿南高専とのですね、包括協定で阿南高専まで行ったんですけど、寮生が結構たくさん何百人もおられて、県外からも、津波のときはって言ったら屋上に、って言うからいやいやいや、屋上じゃなくて津乃峰山に逃げてくださいってことを改めて申し上げました。きっと既成概念、なんていうんだろう、避難場所はここだ、みたいなことでね、東日本でも大変痛ましいことがありましたよね。避難するときはそこだって言って、

山に行った数人の方が助かって避難場所に行った人は大変な被害に遭ったっていうことですから。そういう意味で、逆に言われたことをいや、待てよと思うぐらいのってことですよね。そういう生き抜く力っていう。そこは学校の先生が全て正しいという、今回の校則だってそうなんですよ。学校が正しいと思っててみんな、さっき島委員さんおっしゃったように、みんな言わなかった、意見を言わないほうが生きやすいと思ってしまう世の中ですが、意見を言ってもいいんだと。こういう話ですからですね。そこらは今の教育振興計画のほうでしっかりと盛り込んでいきたいと、このように思っております。ありがとうございます。

他にいかがですか。

大丈夫でしたらですね、この本大綱案を徳島教育大綱として策定いたしたいと思います。いかがでございますか。はい、異議なしということでございましたので、いろいろ様々な長時間、多岐にわたる御議論ありがとうございました。続きまして通学区域制についてですね、いわゆる学区制、事務局から説明をお願いいたします。

（２）通学区域制について

（事務局より、資料２－１～２－４に基づき概要説明）

＜後藤田知事＞

ありがとうございます。本当にこの学区制っていうのはですね、私も公立の、県立の高校ということで、私も両親が城南高校でありまして、私の親父が美郷からで、大変なものですから、もう本当、親戚の家に下宿してとか、辛かったみたいですよ、やっぱりね、当時ですね。そういうことでもしてでもですね、行きたい高校に行って自分の夢を叶えるということがいつしか何か通学が大変だからとか、その地域から人がいなくなるとか、また徳島市みたいな、都市部でも徳島市の人が入れないのはどうしてだとか、こんな話がいつしか出てきてますが、やはり私は学力能力でしっかり選ばれるべきものじゃないかなと思ってますし、以前医学部で男女の比率をあえてその点数に下駄を履かせてとかやって大問題になりましたよね。これ同じことやってんですよ、今まさに。地域によって下駄履かすとか履かさないみたいなですね。私個人としては、これは本当に改めてしっかり検証して、選ばれる選べるそういった環境を、選ばれるということは、競争が働くということですから、それぞれの高校がよりレベルアップすると。進学クラスを作るとか、そういったこと、そしてまた通学の支援なんかも、それは我々県としてできることはやっていきたいと思いますし、あともう一つ、中学における内申書で、これも僕は改革すべきだと思うんだけど、昔は内申書が悪いと行けなかったの。「こんな内申書だったら行けんぞ」って先生に平気で言われてたけど、今は内申書はいいことしか書かないっていう、これもよくわからん慣行に変わってるんですね。こんなことも私はいろいろ進学のツール、今はそういうのを書いてしまって行けなかったら保護者の方に怒られるからやれないんだみたいな、そういうね、もう僕は全くそれは違うと思いますよ。いじめなんかもそういうところから、みんなやっぱり無関心になってる。学校が。もっとコミットするというか。私の知り合いの徳島の人が東京行って、転勤で行って帰ってきて、その子供と正月会ったんだけど、東京では

そのうるさいぐらい学校の先生が、物を忘れただけですごい怒られる。だけど、いじめに対してもすごいコミットするって。でも徳島帰ってきたけども全然、学校の先生は今、その子は中学校でしたけども、全く怒られない。ってことは、いじめについてもいろんな問題についても関心が薄いと、こういう話になっているようでございます。いずれにしろ、ぜひ皆様方にですね、積極的な御議論をいただくために、私から最初の意見を陳述させていただきました。よろしくお願いします。

それでは横田委員から、お願いします。

＜横田委員＞

おはようございます。本年もどうかよろしくお願いします。先ほど知事から古くて新しい話であるということ、実行する、先送りをしないというお言葉をいただきました。通学区域制について、私が感じていることを少しお話させていただきたいと思います。

昭和 46 年度、53 年前の話ですけど、私は総合選抜制度前に高校受験をしました。県南部、県北部の２学区制で徳島市内は共通学区であったということを記憶しています。私は、この区分ですと県北部に在住しています。十分な高校受験の環境であり、徳島市内の、普通科高校４校に自由に行ける立場でありました。残念ながら、成績がそんなに優秀ではなかったので、知事の御両親のように城南高校には行けなかったですけど、私がその時感じたことを今から振り返ってみますと、自らの能力とか努力で高校を自由に選択することができました。反面、学校の格差が歴然と存在していたと記憶します。市内の普通科のある４つの高校は、序列が存在して、学力に合わせて徳島市内の学校だったらどこに行く、市外だったらどこに行くというようなことの選択肢の中で、選んだように思います。先ほど、事務局の方から御説明がありましたが、過去の経緯で徳島県でも総合選抜制度の導入とか、それから撤廃と存続の意見が、いろいろ論議されたということが 23 年ぐらい前にありまして、総合選抜制度というのは、市内の普通科高校の格差というのは是正されたというように聞いておりますし、逆に個性が生かせないということで、みんなが同じような学校になってしまったというようなことも聞きます。私ぐらいの年代のＯＢの方に聞きますと、市内の学校でもやはり母校愛に格差があるような、格差というか、言い方が適切ではありませんが、ＯＢの方でも、自分の母校を自慢する方がいらっしゃったりするように聞いております。市内の流入率等については先ほど説明がありましたが、通学区域は学校選択の自由が第３学区への進学が認められているとはいえ、第３学区在住者と市外の在住者との不公平感がないとは言えないと思います。

よく言われておりますが、この学区制が再び論議されるようになって、少子高齢化や若年人口の減少というのは、日本全体の大きな課題でもありますし、徳島県でもそういったことは話に出ない日がないぐらい出ております。一方で、徳島市内近辺への人口が集中してその他の地域が疲弊化していくという問題もございます。これについては、第１学区と第２学区の高校の存続という課題でもあると思います。そのようなことで地域の衰退、存続に関わる問題があるというふうに思います。

校名を出して恐縮ですが、近年、城東高校が各種クラブ活動で非常に好成績を収め、野球、ラグビー、バスケットボール等が県内で優秀な成績を残されています。一方で文化部活動でも、演劇部が全国最優秀賞大臣賞を受賞されたと新聞で報道されております。この

ことは城東高校が当然、長年の歴史の中で培ってこられた先生方の御指導、生徒の方の御努力によって培われた結果だと思いますが、全県一区校として３年前から文武両道で行うことによって、さらなる飛躍がなされたのかなと個人的には感じております。このような事実の一方で、現状、27 都府県で学区制がなく、20 道府県で学区制があり、この 20 道府県に徳島県は入ってるわけですが、地域の実情を考えますと御承知のとおり、徳島県は全国で一番私立高校が少ない。県外また大都市圏に行くと、県立高校に入るのが非常に難しいので、私立高校を受験したということも、よく聞く話であります。一方、県内で私立高校を増やしてくださいということは無理なので、そういったことも踏まえて、この格差の中でどういうふうにやっていかなくていけないかということは、賛否両論出てくると思います。第３学区への流入率の緩和を今後進めていくのか、全県通学可の高校、全県一区校を計画的に増やしていくということも含め、検討する必要があると考えます。将来的には学区制を思い切って廃止することも議論されるかもしれませんが、私としましたら、この両方、この相反する問題ではありますけども、知事のおっしゃったように、徳島県を自分がやりたいことができる県にして、徳島県に留まることにもつながるのかどうかわかりませんけど、そういったことを望んでおります。取り留めのない話になりましたけど、私のほうからは以上です、ありがとうございます。

＜後藤田知事＞

ありがとうございました。続きまして、岡本委員お願いします。

＜岡本委員＞

失礼いたします。私もこの問題に関しましては本当に賛否両論があって、どちらも本当に分かるところであります。例えば不公平感があるというのは、近隣の地域からはそれは本当にあると思いますし､そこで不利益を被っている学生もたくさんいると存じています。そして、現在の入試制度では、あまり生徒が受験勉強しない、学力をつけない、そして、その地域の学校に当たり前に入れるから勉強しなくても大丈夫だろう、っていうような意識があって、それが教員にも伝わっているというようなことも聞いております。そういう問題点もあると思いますが、ただ、学区制を廃止するとなると、私はやっぱりこの徳島全体がダメになってしまうのではないかと非常に危惧しております。近隣の地域で若者がいなくて、本当に高齢者ばかりで、自然ばかり増えて住民が少なくなるというのをたくさん聞いておりますし、それは周辺だけではなくて、それはいずれ徳島市も同じではないかなというふうに思っております。やはり地域に若者がいる、そして学校があるということは非常に大事なことですし、この徳島をこれからどうしていくのかというところを考えたときに、やはり学校って非常に大事じゃないかなと私は思っています。徳島をどうしていくか、どういう徳島の人材を育てていくかということが、今問われている時ではないかなというふうに思っております。私たちの時代に高校でしたことは何かというと、試験に対応するための勉強で、そして上の学校へ行く受験勉強で。そうするといずれは豊かな社会が待っているような気がしたんですけれども、今はやはりそういう時代とも違ってきていると思います。地方の中でイノベーションを起こすような、地方を盛り上げていって、地方を活性化していくような人材を育てるために、やはり高校教育というのは非常に大事な時

期ではないかなと思います。今、成人年齢も下がり、有権者の年齢も下がった時に高校で本当に一体何の勉強をしていくのかというのが問われる時期ではないかなと、思っております。今、特色化、魅力化に向けていろいろな活動がなされているわけですけれども、本当に社会に参画する本物の勉強ができているのかなと。そこはとても思うところであって、やはり先ほど大綱の中で島委員が課題に目を向けて課題解決をしていく力をつける、とおっしゃいましたが、地域の課題に目を向けて地域の課題を解決していくべく教育があるとすれば、その子どもたちは世界に出ていったとしても、地域を大事にする、地域に目を向けて、何か社会的な活動をしていく子どもに育つと思うので、そういう意味で高校教育をもっと活性化させることが私は必要なのではないかなと非常に思っています。

そして、例えば私の友人で、西のほうで ICT に特化して非常に頑張っている校長がいるんですけれども、小学校を卒業して、そこでもう立ち消えになってしまうというところがあるので、例えば西の学校で ICT ですごく活性化した高校があるとか、それから東南アジアと交流してタブレットで英会話ができるなんていうことが小学校の英語活動が始まった時にあったんですけれども、そういう交流を通して、地域にいても様々な外国語教育、文化教育ができると思っているので、そういう特化したところを作るとか。やはり先ほど子どもたちが自分自身で選ぶ、学校を競争して選ぶっていうのが出てきましたけれども、本当に選ばれる学校を作るということが今とても大事な時ではないかなと思います。非常に理想論かもしれませんけれども、やはり高校教育を通してどんな徳島を作るのか、どんな徳島の人材を育てていくのかっていうのが問われている時期ではないかなと、大綱と合わせて思うところでございます。以上です。

＜後藤田知事＞

ありがとうございます。続きまして、河野委員お願いします。

＜河野委員＞

お願いします。今、委員さんからもいろいろな御意見がありましたが、学区制を急に廃止したらどうなるかということを考えてみたら、やっぱり徳島市内の高校への流入率が増えて、徳島市内の中学生が郡部というか、周辺校に出ていくという現象が生まれると思います。それとやはり、先ほど横田委員、岡本委員もおっしゃったように学校間格差であるとか、受験競争の結果、不本意入学の増加であるとか、私も中学校の教員でしたので、「十五の春を泣かせるな」っていう有名な言葉は、京都の蜷川知事の名言だったそうですけども、とにかく悲しい思いをさせずに、無事自分の夢を叶えられるような高校入学っていうことを、逆に言うと、公立学校が入りやすくしたように伺っております。そういったことで考えると、やっぱり現状の学区制は維持しつつ、先ほどおっしゃったように流入率の緩和であるとか、統一して県下全域への入試、どこからでも入れるような高校を増やすっていうのも一つであるし、もう一つは私個人的に思うことですが、やっぱり中学校の教育の中で、生徒が高校の普通科志向っていうのが強すぎるんじゃないかなと私は思うんです。というのは、どこの高校へ行きたいということがあんまりないと、将来どういうような職業に就きたいっていうことが別にないと、とりあえず普通科受けるか、普通科にするかっていうような、反省も含めてですが、安易な進路指導をしてしまったんじゃないかという

ことがあります。今、文科省でも、普通科改革っていうのを進められていると伺っております。中学校での指導も必要なんですけども、普通科のあり方として、自分で少しインターネットで調べてみると、長崎県の松浦高校ですか、普通科高校が地域科学科っていうのを設けて新しい取組されている。また、近くでは、FC 今治っていうチームがあるんですけど、その FC 今治が今年の４月、FC 今治高校里山校っていうのを開設されるそうです。そのように特化して地域とのつながりを持つ、特色のある学校を、FC 今治高校は当然私学なんですけども、松浦高校は公立高校です。そういう特色のある高校っていうのを、いろいろ考えてられると思うので、作っていただけたら、中学生もいろんな進路に向かって夢を持ちやすいんじゃないかと思います。だから、とりあえずは激変はやっぱり今の生徒に非常にかわいそうだと思うので、有識者会議等で、高校再編であるとか、学科についてとか、それから学区制について検討していただいたらいいんじゃないかと私は思っております。以上です。

＜後藤田知事＞

ありがとうございます。次は三木委員お願いします。

＜三木委員＞

失礼します。学区制は時代の流れとともに変わっていかなければならない問題とは思っております。今回私としましても、いろんな地域の方の意見をお聞きしてきました。言うまでもなく、住んでいる地域によって本当に意見が分かれておりますし、簡単にはいかないものだと思っています。徳島のこれからの将来を左右することでもあり、関心度もすごく高く、それだけに皆様はっきりとした意見を持っておられる方がとても多かったです。それぞれの地域の事情、また御家庭の事情が違う中、多くの方の意見を聞けば聞くほど、これは結論を出すのが本当に大変なことだという実感を改めて持ちました。私立高校が徳島市にしかない徳島県において、公立の果たす役割というのは、他県と比べてどうかって言い切れないものがあるのではないかなということも思っております。人口減少が進む徳島県において、横田委員もおっしゃってましたけど、新しく私立高校が創設される可能性というのは本当に低いと思いますので、現在の、公立の存在がしっかりと確立されている徳島県にしかできない取組というのがある程度あっても良いのではないかなというふうに思っております。今回、全県一区の学校を作ったところ、徳島市内への流入人数に対して、徳島市内からの流出した人数は少なかったという報告を、先ほど受けておりますが、やっぱり遠くの学校に通わせるということに関して、交通網が発達していないこともありますし、経済力の問題とかも出てくると思います。郡部の子が徳島市内に通うのも大変ですけど、じゃあ代わりに徳島市内の子が遠くに通うっていうこともなかなか大変なことになってくると思いますのである程度、徳島市内の子どもたちが学業に専念できる環境というのも、配慮が必要なのかなと思っております。徳島市以外の学区にお住まいの方たちも、先ほどのいろんな首長さんたちの意見の中にもありましたけど、子どもが通いやすい環境を考えることによって、早い時期から徳島市内のほうに住所を移してしまうっていうこともたくさんあるというふうに聞いてますし、今後もそれが増えてしまうのではないかという懸念もありますので、子どもの数が少なくなる中、学区制を見直しするということはとて

も大事だと思うんですけど、各地域の教育の質を上げる努力っていうのももっと一緒にしていかなければいけないことなのかなと思っております。先ほど岡本委員もおっしゃってましたけど、いろんな面白い取組をすることで特色を出すと、それはどこの地域であっても生徒は集まるという事例はいっぱいあるように聞いております。少人数ならではの行き届いた教育とか､そういうこともできる可能性もあるのではないかと思っておりますので、教育現場の混乱とか、子どもたちの不安を極力少なくしながら、いろんなことを改革していくべきなのではないかなと思っておりますので、どういう形に移行するにしても、いろんな段階を踏んで様子を見ながら変革していっていただけたらなという思いを私は持っております。以上です。

＜後藤田知事＞

ありがとうございます。島委員、お願いします。

＜島委員＞

私、小松島市がベースになっていますので、小松島市の中でも、よくこの議論にはなるんですが、産業振興とか、人口にも影響を与える話ということで、産業界からもいろんな意見がございます。小松島市のような、徳島市隣接の市町においては、学区外となった場合には、この第３学区への進学が非常に難しくなるわけですが、これが例えば、若い世代は結婚とか自宅の建設時に、小松島市のような第３学区以外のところから徳島市、小松島市より進学実績の高い高校のある阿南市への転居の原因にもなっていると言われてきております。一方で学区制が廃止になりますと、地元の小松島高校や小松島西高校っていうのは、まずは生徒が集まりにくくなるのではないかという懸念の声も聞いてはおります。徳島市在住の方からは、学区制が廃止されると当然、徳島市以外のところからの流入が増えて、お子さん方が、市外へ出ていくと。これは皆さんがおっしゃっているとおりの事態が生じるということです。

中小企業家同友会、小松島市商工会議所からの声を少し紹介したいんですが、学区制の維持については一部賛成であると。ただ、一方で特色のある高校や科については、県内全域として、現在の学区制のやり方を変えてほしいというようなお話。それと、学区制の段階的な変更に賛成の方の御意見ですが、近くで自分に合う学校があるのがベストですが、遠くてもいい学校に行きたいという傾向は、徳島の停滞している学力の向上や、受験による競争をよりいい方向にもっていくことにつながると。高校の学力ランクだけじゃなくてカリキュラムや部活、地域とのつながりなど、魅力的にすることで通学距離というデメリットを感じさせない学校づくりをしてほしいと。学区による規制は段階的に取り除き、学校側は生徒を集められる学校づくりを、学生側は希望する学校に入学できる学力の向上を図ることが大切だと、そういう御意見をいただいています。

私自身は学区制については廃止もしくは段階的廃止をすべきだと思っています。学区制の廃止で生徒が集めにくくなる懸念のある高校は、特色を打ち出していくべきですし、普通科は特色を出しにくいと言われておりますが、例えばですが、授業力が全国屈指に高いとされている教員のオンライン授業を取り入れて、現場の教員の方がフォローに回ることで、こういった新しい教育の仕方で学力の伸びしろが大きくできるかどうかという検証も

できる機会となると思いますし、働き方改革にもつながる可能性があると思っています。学区制の変更という、ピンチをチャンスに変えることになると思いますし、校則の話と通ずるところがありますが、大人が変化を乗り越える姿、教育大綱にある果敢に挑戦する姿勢を、子どもに見せる機会にもなるように私は考えています。私の個人の経験で大変恐縮ですが、私は香川県に、中学校三年の時住んでいましたので、公立高校受験いたしましたが、落ちましてですね、他県の私立高校に行きまして、十五歳の春まさしく泣いてたんですが、私にとっては非常にいい経験ですし、それをバネにしたっていうところもあります。社会に出るとやっぱりどうしても競争っていうのはありますので、本当にこう、ある意味甘やかしていいのかっていうような視点も必要だと思っています。有識者会議を設置して議論していただくのはありだと思いますけども、その議論を踏まえて県民のためになる結論を出していただきたいと思いますし、３年ごととかの見直しもいいと思いますが、10 年後 20 年後のあるべき姿を考えてバックキャスティングで考えていくってことも大事だというふうに考えております。私から以上です。

＜後藤田知事＞

ありがとうございます。それでは、榊教育長お願いします。

＜榊教育長＞

いろいろな御意見いただきまして、ありがとうございました。通学区域制の問題につきましては、いろいろな御意見があることは承知しております。先日、知事のお計らいで県東部の市町村長の地域懇話会にも参加させていただいて、学区制についていろいろ御意見をいただいたところです。その中では子どもたちを納得させるような議論が必要ですよとか、時代に応じた見直しを進め、早期の解消を図ってほしいとか、スピード感を持って対応してほしいとかっていうような意見がある一方で、高校再編とか流入率、高校教育などの話もいただいたり、変更するのであれば丁寧な説明を、というような意見いただきました。子どもたちや保護者だけでなくて、やっぱり各市町村にも大きな影響を与えるものであるということも認識をしております。今、委員さんから様々な御意見いただきました。それでですね、やはり学区制がどうあるべきかという話をする中で、共通していただいた話につきましては、やはり高校に入って子どもたちに力をつけていくのだと。子どもたちにしっかり力をつけていくために、どういうことをしていくのかっていうことは、皆さん共通した御意見だったと思います。その中で、各校の特色化、魅力化、選ばれる学校を作るっていうようなお話があったと思っています。委員さんからの御意見は様々いただいたんですけど、もっとこう幅広い御意見をいただく必要があるというふうに考えています。今後、３年間の入試で得た知見というものを結果分析、今、スピード感を持って進めているところですが、教育委員会の中で、しっかりこういう意見を踏まえて、さらに多くの意見をいただきながら、学区制の議論をスピード感を持って進めていきたいというふうに考えております。以上です。

＜後藤田知事＞

ありがとうございます。今、榊教育長おっしゃってたようにですね、だいたいその論点っていうのは出ておりましてね。ただ、まだもうちょっとウイング広げてですね、いろんな意見を聞くっていうことは大事ですし、私はやっぱり現役の先生だとか、保護者、いろんな人にもいろいろ聞くべきだと思いますし、さっき岡本委員からもあったけど、例えば海部高校なんかはもう本当に野球校というかスポーツで、今人もたくさん去年よりもまた多い人数が下宿するということで、我々牟岐町にあった旧海部病院の改修をして、そこで受け入れるとか、池田高校に至っても、ちゃんとその地域コミュニティの施設と併設した池高の下宿も作る、この前も起工式させていただいたところですし、そういったところはいろいろやっておりますし、ICT においても、私もよく知っている中川先生っていう人が東みよしでもともと、一昨日僕は高志小学校行ってね、それは武田先生、中川先生ががっつりヒューレットパッカード出身の吉野さんていう人を連れてきてそれで、みんな知らないですよ僕も含めて。専門家にちゃんと聞いて任せるっていうのが大事で、そのおかげでもう最先端。もう昨日行ってびっくりしました、小学校一年生でローマ字習ってないのにローマ字でこうやって入力してました、小一が。こういうのをみんな知らないんですよ、県民の皆さんもね。やっぱり昨日もメディアも、テレビも今日はがっつり来てらっしゃるけど、そういうのを報道してないからですね、わからない。ですから、改めてそういうのは現場を報道していただきたいなメディアの人には、それで県民に伝えていただきたいなと思いました。そういうものを横展開するのは教育委員会の仕事ですよね。これは小中学校、市町村でありますが、校長先生の人事権も含めて県教委であるわけですから。そういう意味でやれるとこはやれるし、じゃあ例えば徳島大学どうなんだって、若い人流出しないためにじゃあ全員徳島県民にするのかと、そういう話してるのと一緒なんですよね。そうじゃないよねと。今 7 割は県外の人です。徳島大学は。だから本当に街に若者がいなくなるから､若者の選択権を犠牲にして選択肢を与えないって言ってるようなもんですよね、ある意味、大人が。それで本当にいいんですかっていう話も、やっぱりいろいろ議論すべきだと思いますよね。子どもまんなかって言っても、政府のど真ん中の政策でやってるのに、子どもの数が地域の少子高齢化を防ぐための道具のようなことを言う人もいるんだけど、私はちょっと違うと思うんですよね。両論併記、両論言うという、これはもちろん、賛否が分かれるからなかなかあれなんだと思うんですけど、我々首長は決定しなきゃいけないんですよね。責任がある。それによってまた批判もある、評価もある。だからこそ、教育委員会さんはそのリスクがないのでもうちょっととんがった意見を言っていただきたいなと、このように思います。政治家のような意見だったもんですから。島委員は非常にそこらは踏み込んで言っていただきましたけれども、そういう意味で教育長もまた幅広い意見を聞いていくと、こういうことなんだと思います。経営もそうだと思います。意思決定しなきゃいけない立場がたくさんございますから、我々もそういうことでございますので。

もちろん、この話をするとすぐ学区制を全廃するとか、そういうまた報道になると、徳島はよく県民を分断するのが好きですからね、報道は。そうじゃないんですよ。今も御意見あったように、城東高校の事例をまた横展開、ちょっとずつしていくというやり方だって当然ある。そういう選択肢だってあるし、もうちょっと委員の皆様に情報を提供した上

で、また幅広くですね、聞いた上でまた皆さんつかさつかさでいろいろ聞いていただきたいし、島さんはニュービジネス協議会という組織の会長もやってててですね、まさに社会に出た後も想定しながらのお話もしていただいていると思うんで、そういうことだと思うんですよね。やっぱり流出しちゃいけない、出ていくなっていうのは、これは我々大人のエゴですよ。そうしないための高校を作ってますか、そうしないための魅力ある県を作ってますか、っていうことが本質的な話なんですよね。だから私も魅力度、安心度、透明度っていうビジョンを掲げてやっておりますので。ぜひ、この問題は古くて新しく、そしてまた熟議をして、そして決断をしなきゃいけない。そういった課題だとこう思っておりますので、引き続き、未来に引き継げる徳島として、頑張っていただきたい。あと科技高の例もね、また教育委員会さん、ぜひいろいろ分析して、皆さんに情報共有すると面白いですね、いろんな高校が一緒になってっていう。今後少子化の流れ、48 万人時代が 2050 年に来ますよね。そうするとじゃあ、城東、城南、城北それぞれ一校で成り立つんですかっていうことが、10 年 20 年先の考え方に即したものだと思ってますし、そういったことも含めて、今中学校レベルでは、もう部活が成り立ちませんのでですね。スポーツの地域移行の議論も、これも早急に今我々も、教育委員会部局とこっちは経営部局、一緒になってやっていきたい、やっていってるところでございますので。何かと課題が多いので、先送りせずやってまいりたいと思います。

今日はまだ時間ありますので、さらに御意見あったらいただきたいと思いますが。

＜島委員＞

そうですね。我々、学事視察で神山まるごと高専さんに行かせていただきまして、今、倍率が 9 倍で、44 人中徳島の方は 4 人と、えらいエッジの効いた学校で、これを学事視察で行く県教育委員会の姿勢というのも非常にいいなというか。そこで感じた、いい部分は取り入れて、非常に県外からもぜひ行ってみたいと、そしてまた卒業生の子たちがとがった取組というか、我々大人に対しても刺激を与えてくれるような取組をしていってくれることを楽しみにしてますし、私もいろいろ関わって、彼らからも刺激をもらいたいなというふうに思ってますので、徳島にそういう魅力のある学校が増えて、ぜひ徳島に行ってみたいっていうようなところでも頑張っていくべきかなというふうに思っております。

＜後藤田知事＞

ありがとうございます。まさに最終形はイノベーティブで未来を切り拓いていく子どもを育てるという中で、そこでまた両論でちゃうんですよね。だから今おっしゃったように、僕も徳大の 7 割が県外、まるごとは 44 人中 4 人が県内。高専も結構県外から来ていると。それはすごいねって、我々は誇りに思いながら、じゃあ徳島県の若い子たちにはいいところにはみんな、いやいや地域を守るためにいかせません、これは矛盾してるんですよね、すごく。だからそこも含めて委員さん改めて意見聞きたいんですけどいかがですか。

＜岡本委員＞

地域を守るために地域に縛り付けるということではなくて、本当に地域を活性化させるような本物の面白い教育ができる、神山高専でありますように、何か地域のために活性化

できることがあるんじゃないかなと非常に思います。都会にはないものが徳島にはある、それは何だろうか。それをどう活性化していったら、自分たちの未来が輝いて、徳島が輝いて、自分たちが幸せに生きられるんだろうかっていうような、本当にそういう学習ができるような高校教育であってほしいと私は思うのです。そういう高校がいくつかできて、この学校で学ぶと人を幸せにできる、地域を幸せにできる、自分たちが幸せに生きられるっていうような学校を作ることでそこの学校に行きたいと思わせる、選ばれる学校を作ることが大事だと思います。選ばれる学校っていうのは、まず学習環境を整えることが大事ですし、教員の資質を高めることが大事ですし、その中で行われる本物の教育活動が大事ですし、そういう高校を今作る時期ではないかなというふうに思います。ちょっと学区制と離れるかもわかりませんが。

＜後藤田知事＞

いやいや、離れちゃいかんのですよね。そこも含めて学区制について我々は決断をしなきゃいけないものですから。その前提で、学区制をどうしていくか、そして先ほどからあります、普通科をじゃあどう高度化していくのか、その専門高校をどう、じゃあまるごとに近いような高校にしていくとか、やっぱりそこをぜひ踏み込まないと、この議論はもう両論併記で終わってしまうんでですね。さっきも河野委員さん、おっしゃったようにですね。そこらへんのところはいかがですか。

＜河野委員＞

先ほども言いましたように、やっぱり特色ある学校ということで、FC 今治の高等学校では、だいたい授業は午前中で、昼からは探究ゼミとか特別教科とかいろいろやるようです。講師には野球の古田さん、EXILE の HIRO さん、サイボウズの青野さん、陸上の為末さん、テニスの伊達さん、柔道の井上康生さんとか、各分野の一流の方が来て指導するっていうのが、ホームページを見ていると出ております。これもいろいろ特色あって面白い、私学だからできるっていうこともあるんでしょうけど、先ほど言った長崎の高校がどのくらい地域との交流を盛んにしていくのか、地域おこしとか、いろんなことを考えていくということを書いてましたので、そういうのも見てみたいなと思っています。徳島県でも特色ある高校の取組として、そういうようなことができるところがあったら、本当、子どもたちにはいいのでないかと思いました。以上です。

＜後藤田知事＞

横田委員さん、どうぞ。

＜横田委員＞

私からは、郷土愛ということで、この前、徳島県が全国の女子駅伝で 16 位になって、途中、8 位になった時も必死で見てたんですけど、知り合いから聞いたら、全員が徳島に縁のある人ばかりが参加していたと。中学を卒業して県外へ行ってる人もおるけど、最終的には徳島県の会社に就職している、もしくはふるさと登録され、徳島の代表として出場したいという人がそろったと。そして、監督さんとかコーチの戦略っていうのが相まって、

非常に好成績、昔は確か鳴門に有名な選手がいらっしゃったから 12 位になったと思うんですけど、そういうことを聞いたら、やっぱり次の日、月曜日火曜日あたりはその話題が県内出てくるわけですよ。今、県内から一旦出ることが良くないということで、全部県内でそろえてるってことは実際ありえないことなんで、そういうことを広めていって、郷土愛というのをみんな育んでいく、共通の話題で久しぶりにいい話聞いたなあということを感じました。
だから、教育というのが全て絡んできていることだとはいえ、今回駅伝でそのことを感じました。自分として何ができるかとか、企業の経営者として何ができるかって、地域でグラウンドにネーミングライツで協力させてもらったり、ガンバロウズに支援をしたり、そういうことはやってますけども、実際には本当にこれからの時代を支えていく人たちが、そういうものにもっともっと入り込んで、体力のある会社が地域の中で貢献することによって、また将来的には徳島に帰ってくる人を少しでも増やしていける。普通に考えたら県外の大学にも、徳島大学は 70%県外の人とお聞きしたんで、それから言うと、県外行くのが当たり前な時代になっているので、一生懸命、小学校中学校高校と教育をされて、先生がいい大学に、東大、京大や、早稲田、慶應に何人輩出したということが結果ではなくて、そういう人たちがまた徳島のことを、地域の中だけでなく、都会で成功してこちらに帰ってくる方もいらっしゃいますので、能力だけでなく、前回ちょっと話はしたんですけど、やっぱりいろんな活動の中で、徳島に帰ってきて力を出してくれるような人を増やしていくことも、教育としては大切かと思います。専門的なことを持ち合わせてないので、言えることはこのぐらいです。

＜後藤田知事＞
　いや、ありがとうございます。非常に大事な御指摘で、やっぱりおっしゃるとおり関係人口をですね、増やすっていうことが、これからの地方創生、人口減少する中でも、いや、岡山のことをよく知ってる、今回も被災地で石川県との関係が、スポーツや文化や留学やいろんな関係であるっていうことは、すごく日本国民が密になる。海外ももちろんそうであります。今回もタイにも私どもは高校生、大学生を阿波踊りで派遣することにしました。これは教育的な観点、一部には有名連でなきゃだめだとか言う人いたけど、とんでもない話で、有名連のスターが徳島大学の大学生だったり高校生だったりしますからね。それもみんな現状知らん人が言うわけですが。本当に関係人口っていう意味では、今もうもし県教委のほうで説明できたら、運動部もね。県立で実は県外から来ていただいている高校が多いですよね。そこら辺なんか誰か、例えば別に正確じゃなくても説明できる方いますか。例えば私が聞いているのは、城東高校さんだって、広島かな岡山かな、広島ですか、来ていただいたりして、そういう関係で内田さんっていう広島出身の人がいろんな形でやってくださって、企業の人もみんな応援していただいてるとかですね。徳島にある私立高校も、県外の人がたくさんいるし、私の子どもも今高三ですけど、この前滋賀のサッカーで準優勝した近江ね、あれも監督がもう 70 人ぐらい全国リクルートしに行ったとかね、それが現実なんですよね。だけど徳島だけなんか鎖国のように、いや県立が多いから、そして学区制を守るんだって。いや、もう全国はそういう競争をしているんだっていうこと。そしてさっき委員さんも言ったように、僕はね、普通科志向っていうこれもね、いや本当かな

と。普通科に仕向けてしまってんじゃないんですかと。小中学校の先生たちが。普通科に行っとけばなんとかなるって、で普通科に行くとだいたいみんなとりあえず大学行くかみたいな話になって、また県外に出ちゃうっていうパターンですよ。僕からするとドイツのマイスターのように、14 歳ぐらいからね、何をやりたいとか何に関心があるとか、この芽吹というか、息吹をちゃんと察知して、それを伸ばしていく。君はこっちのほうが面白いよとか、高校でもアニメ学科作るとかホテル学科作るとか、昨日も阿南高専では、これからバッテリーバレイやるから、いろいろ電池だとか、そっちの化学やってくださいよって話したりしてきたんですけど。昔、阿南高専の学科再編の時も、日亜の方や大塚の方が、徳島は化学の大塚、化学の日亜があるのになんで工業やってんだと。もちろん、ロボコンも大事ですよ、はんだごても大事。そういうのも大事だけど、化学の学科がねえぞって言われて、そうだなと思って、国立だから私、国会議員時代、学科再編させてもらったんですよ、あれのね。ですから、そういう社会との本当の結節点である高校ですからね。これはもう慎重かつまた大胆にですね。やっていかなきゃいけないと思ってますんで。また他なんか御意見ありましたら。

＜三木委員＞

先ほどの普通科の話で、普通科志向があるというのは、今は小中のあり方からつながっているのかなというのもあるので、それだけでない選択肢をもっと増やすという持っていき方も大事だなということを今聞かせていただいて、すごく感じました。ただ、中学三年生っていう年で､それだけ自分の将来を明確に考えられない子もやっぱりいると思います。そんなことないのかもしれませんが、今だとやっぱりできる子、どんな環境でも切り拓いていけるような子たちのことに比重があって、いろんな政策が語られていってしまっているんではないかなということがありますので、そういう迷ってしまっている子たちの、居場所、生き方っていうのも一緒に付け加えて考えていただけたらなと思います。

＜後藤田知事＞

少なくとも私ども県行政、教育委員会さんと一緒に多様性ということを基本にやってます。そして選ぶ権利ということで、今度も国府支援学校にも相当多額な設備投資をさせていただきます。ハードソフト含めて。そういう点では、できる子とか、そういうことは。私どもは全く思っておりません。多様性をしっかり汲みながらやらせていただいておりますが、ただ、どんな立場にいる子でも選ぶ権利、選ぶ環境を作ってあげるっていうのが、我々の本意でございますので、その点はしっかり御理解いただきたいと思ってますが、河野委員さんどうですか。普通科高校の志向というのは、これ何が問題なんでしょうか。問題じゃないかもしれないしね。

＜河野委員＞

先ほど僕、自分の反省も込めて言ったんですけど、やっぱり進路を決める時に、将来の職業とか夢とかっていうのをしっかり引き出せてないというところがあるのかなと。とりあえず普通科高校行って、その３年間に決めて次の段階でね、大学でもいいし就職でもいいし、そこで決定しますか、っていうような話に進路指導がなってしまっているのかなっ

ていうのがある。だから、いろんな職業があるし多様化していい。知ってる人に聞いたら、本当に家を建てる職人さんがいなくて、家もなかなか建たないし、道路を工事するにも職人さんがいない、っていうことを考えたら、この先、少子化、人口減少でどういうふうになっていくんだと不安がある。だからいろんな職業があるし、勉強だけでなく自分の特性というか、個性を活かした職業につけるような指導っていうのが必要なのかなと。職場体験とかいろいろやって経験は踏まえているんですけれども、まだ十分でないのかなと思ったりするところですし、親御さんの意識もあると思いますので、そこら辺も変えていかなければいけないのかなと思っております。

＜後藤田知事＞

おっしゃるとおり、私も職場体験とかインターンシップとか、これを海外に行くともう高一ぐらいからやってるとか、もっと言えば中学とか 12 歳からやってるとか、こういったことも非常に大事だなと思ってまして。ここは教育委員会さんだけじゃできませんから、横田さんや島さん、経営者の皆様方にもまた御協力、いやもうすでにね、ニュービジネスでも子どもたち向けにいろんなことをやってくださってるんでですね。子どもの成長のスピードそれぞれって違いますから、もちろんいいんですよそれで。野球選手ですら高校で活躍しなくてもインディゴでプロになってっていうそういうものですから、みんな違ってみんないいんだと。こういう流れで、それぞれに合わせながらも、そういう環境づくりをまたしっかり作ってまいりたいと思いますので、またこの件は今、皆さんからいただいている本当にいろんな様々な話と、また 10 年 20 年先を見据えた議論がなかなか拙速にはいきませんが、ただ熟議に熟議を重ねて、結論は出さなければと思っております。どうぞよろしくお願いします。では他にこれはというのがありましたら。教育長どうですか。

＜榊教育長＞

そうですね、教育論の話をすれば本当にキリがないくらい、いろんな課題もたくさんあります。先ほども言いましたように、やっぱり子どもにしっかり力をつけていくのだということを柱にして、いろんなことを進めていかなければならないと思います。校則の問題で本当に子どもたちは、自分たちの考えを、しっかり形にするっていうことを覚えはじめてくれたのかなと思っています。それを受け止める仕組みをですね、教育委員会はしっかり作っていくんだっていう。それについてはいろんな御意見もあるんですけど、先ほど知事のお話にありましたようにいろんな方の意見を聞いて、熟慮を重ねて決定をすると、そこをスピード感を持ってやっていくのだっていうことを、改めて教育委員さんにもお願いをして、やっていきたいと思っています。ありがとうございます。

＜後藤田知事＞

こちらこそ、教育委員会の皆様には何卒よろしくお願いしたいと思います。

それでは、この件についてはこの辺りにして、あとほかにその他で何かございましたら。ちょっと私からなんですけど、教育大綱で 1 ページ目に「こうした考え方の下、知事と教育委員会が」って言うんだけど、これ「知事」じゃなくて「県」じゃないのこれ。これは法律上知事になっているの、総合教育会議の法律は。「知事と」ってなってるわけね。

＜菊地部長＞

首長部局の代表的な名称としての「知事」っていう。法律上の文言で、個人としての「知事」と、組織としての「知事」っていうのがあるので、これは組織として。代表という意味で。

＜後藤田知事＞

「県と教育委員会」ってしたほうがすっきりしない？そんなことない？みんな他の県もこういう感じなの。そうですか。私が責任を持てということですね。

そのほかに、なければいろいろ長時間、熟議をいただきましてありがとうございました。また、改めてよろしくお願いいたします。じゃあ今日はこの辺で。

＜菊地部長＞

ありがとうございました。一点、事務的な御連絡をさせていただきます。会議録の公表についてでございますが、本日の会議録につきましては、事務局で取りまとめた上、各教育委員さんの皆様に御確認をいただきまして、御発言者名も入れた形で公開をしたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。以上をもちまして、令和５年度第３回徳島県総合教育会議を閉会します。お忙しい中、本日はどうもありがとうございました。